牛潟(1)遺跡 5

A report of excavation at
USHIGATA(1)-site

2010

TSUGARU-city Board of Education,
Aomori-prefecture, Japan

青森県つがる市教育委員会

牛潟 (1) 遺跡５

2010

青森県つがる市教育委員会

はじめに

「縄文遺跡の宝庫」、つがる市西縁を画する屏風山砂丘地帯には、国史跡である田小屋野貝塚や亀ヶ岡石器時代遺跡のほかにも、多くの縄文遺跡や平安時代の遺跡が所在しております。

そのため、各種開発行為に伴い、ここに所在する遺跡の取扱いについて、みなさまと協議する機会が非常に多くなっております。一部計画変更等で対応可能な場合には、遺跡の現状保存をお願いするのが文化財保護側としての基本姿勢ですが、協議の結果、やむを得ないと判断された場合には、各種開発行為前に事前の発掘調査を実施して遺跡の記録保存を行い、調査終了後に開発行為を実施していただくという手はずとなっております。

今回の調査も土砂採取行為に伴う事前の発掘調査として実施したものです。縄文時代の遺跡だけではなく、数メートルに及ぶ屏風山の厚い砂丘砂の下から、平安時代の大規模な畠跡も確認され、農村地帯に暮らす我々としましても、「平安時代の農家や畑作とはどんなものだったのか？」という、興味をそそられるものでした。これらの成果が、つがる市の遺跡や文化財の理解にとって、貴重な資料になれば幸いであると考えております。

最後になりましたが、今回の調査におきまして、ご指導・ご協力いただきましたすべての方々に厚く御礼を申し上げます。

2010（平成22）年3月31日

青森県つがる市教育委員会
教育長　葛西　嶠輔

例　言

1．本書は、青森県つがる市牛潟町鷲野沢地内で実施した、牛潟(1)遺跡（青森県遺跡番号209101）の発掘調査報告書である。
2．今回の調査は、平成19～21年度に国庫補助金と県費補助金を受け、つがる市（補助事業者：つがる市長　福島弘芳）が実施した、「市内遺跡発掘調査事業」の一環である。
3．調査は、つがる市教育委員会（教育長　葛西嶠輔）が主体となり、佐野忠史（つがる市教育委員会文化課学芸員）が調査担当者となり実施した。
4．調査目的・地点・期間・面積等については、「1-2調査要項」を参照していただきたい。
5．本書は、佐野忠史が編集・執筆した。
6．先行して各種講演会資料、新聞記事等のマスコミ媒体報道があるが、本書はそれら全てに優先する正式報告である。
7．写真は佐野忠史が撮影し、図版は佐野の指示のもと、羽石智治・葛西慎也・成田　靖らが作成した。
8．遺跡の地学的見解や石器の石材鑑定については、川村眞一氏にご指導いただいた。
9．調査から本書の刊行にいたるまで、下記の諸機関・個人にご指導・ご協力いただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略）。

文化庁文化財部記念物課　青森県教育庁文化財保護課　NPO法人つがる縄文の会
村越　潔　川村眞一　小山内壽一　藤沼邦彦　岡根達人　榊原滋高　藤原弘明　齋藤　淳　中田書矢
伊東　信　宮川慎一郎　岡本康嗣　岩井浩介　武田嘉彦　瀧本　学　工藤清泰　木村淳一　児玉大成
古屋敷則雄　榎本剛治　小林　克　三浦圭介　三宅徹也　鈴木克彦　中嶋友文　福田友之　工藤　大
岡田康博　川口　潤　鈴木和子　小笠原雅行　佐藤智雄　土肥　孝　原田昌幸　岡内三眞　谷川章雄
高山　優　池田悦夫　佐々木彰　秋岡礼子　葛西繁子　相馬信吉　成田誠治　雪田知宏　藤本雄大　川嶋大史
菊地嘉明　葛西一郎　並木　仁　鳴海義昭　小山内誠　野宮虎夫

凡例

1．図・表等の番号は、各章ごとの連番とした。また、巻末に写真を一括して掲載した。
2．図中の水準高（標高）は、東京湾中等潮位（T.P.）を基準とする値を示している。
3．層序は、基本層はローマ数字（Ⅰなど）、遺構覆土は算用数字（アラビア数字：1など）で表記し、層の色調は『新版　標準土色帖』第15版（小山ほか1995）を基準とした。
4．遺物図に示すスクリーントーンの指示は下記のとおりである。

目　次

はじめに
例言・凡例・目次

	ページ
第1章　調査と遺跡の概要	1
1-1　調査に至る経緯	1
1-2　調査要項	1
1-3　遺跡の概要	2
1-4　調査の方法と経過	3
第2章　平成19（2007）年度の調査	5
2-1　調査概要	5
2-2　地形と層序	5
2-3　遺構と遺物	6
第3章　平成20・21（2008・2009）年度の調査	15
3-1　調査概要	15
3-2　地形と層序	15
3-3　遺構と遺物	15
第4章　まとめ	55
主要引用参考文献	56
巻末写真1～38	57
報告書抄録	95
つがる市の文化財関係報告書	96
奥付	96

第1章　調査と遺跡の概要

1-1　調査に至る経緯

ことのはじまりは、平成18（2007）年3月にさかのぼる。土地所有者から業務を請け負った土砂（砂利）採取会社関係者が、当該地における埋蔵文化財の存否の確認に、つがる市教育委員会文化課を訪れた。遺跡地図上で確認したところ、当該地は平力地区に所在する縄文遺跡、牛潟（1）遺跡（うしがたかっこいちいせき）の範囲内に該当しているため、会社関係者と文化課職員がミゾレ降る中、その日のうちに現地確認を行った。その結果、周囲に縄文土器が散布している上、土砂採取予定地端部崖面に露頭した土層を確認したところ、砂丘砂の下に遺物包含層と遺構の掘り込みがみられた。数日後、つがる市教育委員会担当職員が青森県教育庁文化財保護課担当部署に対処について相談し、さらに後日、現地を見て協議した結果、土砂採取前に事前の発掘調査が必要であるという結論に達した。

つがる市教育委員会文化課では、このことを事業主である土地所有者及び土砂採取会社に連絡したところ、両者はこのことを理解され、当該地における牛潟(1)遺跡の事前の発掘調査を実施する手続きを開始した。

発掘調査は、国庫補助金・県費補助金を受け、平成19～21年度の3ヶ年度に実施した。本書はその発掘調査報告書である。

1-2　調査要項

1. 調査目的

個人が事業主である土砂採取事業に先立ち、事前の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存に資する。

2. 調査遺跡・調査期間及び調査地点等

遺跡名：牛潟（1）遺跡（うしがたかっこいちいせき）＜青森県遺跡番号209101＞

所在地：青森県つがる市牛潟町鷲野沢地内

①平成19（2007）年度

発掘調査期間　平成19（2007）年 5月14日～10月31日

調 査 地 点　つがる市牛潟町鷲野沢100-7・29-143＜調査面積1,200m²・出土遺物76箱分＞

②平成20（2008）年度

発掘調査期間　平成20（2008）年 6月 1日～10月 3日

調 査 地 点　つがる市牛潟町鷲野沢100-7＜調査面積3,000m²・出土遺物15箱分＞

写真1-1　牛潟(1)遺跡の位置（2004＜平成16＞年撮影）

③平成21（2009）年度

発掘調査期間　平成21（2009）年 6月 1日～10月 2日

調 査 地 点　つがる市牛潟町鷲野沢100-7＜調査面積1,500m²・出土遺物190箱分＞

3. 調査主体者・調査組織等

＜調査主体者＞

つがる市教育委員会（補助事業者　つがる市）

＜調査体制＞

調査担当者・調査員　佐野　忠史　つがる市教育委員会文化課学芸員・日本考古学協会会員

副担当　　羽石　智治　つがる市教育委員会文化課学芸員

作業員　瓜田千恵子　鶴賀谷毅子　葛西慎也　成田　靖　成田勇人　舘山章子　天坂詩子　工藤孫…

半田勇治　横山初子　中村悔子　小寺良子　村上リエ　工藤則子　工藤重子　中田いつ子　葛西文子

＜調査指導機関＞

文化庁文化財部記念物課・青森県教育庁文化財保護課

つがる市遺跡保存検討会　会　長　村越　　潔　弘前大学名誉教授・日本考古学協会会員

副会長　川村　眞一　日本地学教育学会会員・元青森県立弘前工業高等学校校長

委　員　小山内薄一　青森県文化財保護指導員

＜事務局＞

つがる市教育委員会文化課

教育長	小林千代喜（平成20年 5月退任）		文化課長	尾野　史郎（平成19年度）	
教育長	葛西　峠輔（平成20年10月着任）		文化課長	須藤　紳逸（平成20年度）	
教育推進監	川嶋　芳仁（平成19年度）		文化課長	小寺　　保（平成21年度）	
教育推進監	高橋　和久（平成20年度から）		課長補佐	對馬　誠貴	
			係長	野呂有忠子	

4. 発掘調査報告書

平成19～21（2007～2009）年度試掘調査分を、平成21年度に刊行する（300部）。

5. その他

調査によって得られた、遺物・写真・図面等の諸資料は、つがる市教育委員会所管の施設に保管し、活用を図る。

1-3　遺跡の概要

つがる市内には、現在112ケ所の遺跡が所在するが、その多くが、つがる市西縁・南縁を画する丘陵部に位置する。今回調査を実施した牛潟（1）遺跡も、つがる市西縁を画する丘陵、屏風山砂丘地帯の東縁部が津軽平野の西縁に接する付近に位置している。この付近は、つがる市北西部にあたり、平成17（2005）年の市町村合併前は、「車力村（しゃりきむら）」だったところで、現在は「車力地区」と呼ばれている。砂丘地帯でありながら、この地区には縄文遺跡や平安時代の遺跡などの所在が古くから知られている。ここでは、牛潟（1）遺跡とその周辺の遺跡について述べる。

1. 牛潟(1)遺跡（集落跡　縄文前～晩期・弥生・平安）

標高数m～20数m程度の丘陵に立地する縄文前～中期の「円筒土器文化」を中心とした遺跡。平成元～9（1989～1997）年にかけて7次にわたり行われた調査では、車力村教育委員会の委嘱を受けた新谷雄蔵氏の手により縄文前期末葉の住居跡をはじめとする10数軒の竪穴住居跡や、ヤマトシジミの貝殻が堆積されたフラスコ状土坑などが発見され、本遺跡が円筒土器文化期における屏風山砂丘北部の中心的・拠点的な集落であった可能性が明らかにされた（新谷ほか1990ほか）。

2. 牛潟(2)遺跡（集落跡　縄文前～晩期・弥生前期・平安・中世・近世）

標高数m～20m程度の丘陵に立地し、道路を挟んですぐ南には牛潟（1）遺跡が所在する。土砂採取行為に伴い、平成15～18（2003～2006）年に発掘調査が実施され、10世紀後半～11世紀前葉の平安時代中期の構列を伴う集落跡と、これに関連する大規模な畠跡が検出された（佐野2009ほか）。これらは、今回報告する牛潟（1）遺跡発見の畠跡と同

時期のものである。また、道路状遺構に直交して並ぶ縄文前期末葉～中期前葉の土坑墓群は、年代や位置関係の近さから、前述した新谷雄蔵氏らが牛潟(1)遺跡で発見した円筒土器文化期の住居跡にくらした人々が埋葬された墓と推定された（佐野前掲）。

3. その他の周辺の遺跡

このほか、発掘調査によって縄文前期前葉の土器や平安時代の集落跡が確認された花林遺跡（塚田2002）や、縄文中期・平安時代の散布地とされる中崎遺跡（新谷ほか前掲）が牛潟(1)遺跡の周辺に位置している。

図1-1　牛潟(1)遺跡の位置
（青森県教育委員会2009を改変）

1-4　調査の方法と経過

1. 方法

調査地点は、平成15～18年に発掘調査した牛潟(2)遺跡（佐野2009）とは道路を挟んで南東側に隣接する。また、今回報告する平成20・21年度調査地点は、平成元～9年の調査地点（新谷ほか1990ほか）と隣接し、一部重複している（図1-2）。

調査は、各年度とも5×5mの方眼グリッドを設定して実施している。平成20・21年度は、同土方眼座標（第X系・世界測地系）に則ったグリッドを設定し、東西南北のグリッドラインは、国土方眼座標のラインと一致している。

しかし平成19年度は、先に調査した牛潟(2)遺跡での任意のグリッドラインをもとにグリッドを設定したため、国土方眼座標のラインからは、N-9.5°-Eの傾きが生じている。

各年度ともグリッドは東西方向に西から東に向けアルファベットをAから付し、南北方向は北から南に向け算用数字を1から順に付し、A1・B7のようにグリッド名を呼称した。

調査は、表層や厚い砂丘砂は重機で掘削し、遺物包含層に達した時点で以後の掘削を人力で行った。遺物包含層や遺構の調査は、土層を観察しながら掘り下げた。遺物包含層の遺物はグリッド別に層ごとに取り上げ、遺構内の遺物は層ごとに取り上げた。なお、土層断面図のほか適宜微細図や遺物ドットマップを作成した。遺構やその他の

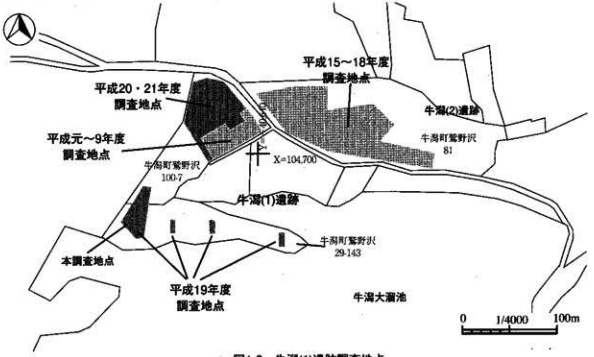


図1-2　牛潟(1)遺跡調査地点

土層断面図・平面図等は縮尺1/20を基本とし、適宜縮尺を変え作成した。

遺構番号は、基本的に種別に関係なく、調査地点毎に確認順に連番を施していった。ただし、平成20・21年度は、調査地点が重複するため、遺構番号を連番とした。つまり、20年度の最後の遺構番号の次の番号を、21年度に最初に確認した遺構に施している。

写真は、現場では35mm一眼レフカメラで、カラースライドフィルム（ISO100）・カラーネガフィルム（ISO400）を用いて撮影し、デジタルカメラを併用した。整理では、デジタル一眼レフカメラで、遺物写真を撮影。遺物実測図作成・遺構図トレース等には、株式会社CUBICの「遺物実測支援システム」「遺構実測支援システム」も使用した。

2. 経過

発掘調査期間や調査面積、出土遺物量などは、「1-2 調査要項」を参照。また各年度とも発掘調査中より整理作業を実施した。調査内容については、つがる市遺跡保存検討会の指導を受けたほか、平成19年度には、青森県教育庁文化財保護課担当職員が現場視察。なお、平成19・20年度は、「青森県埋蔵文化財発掘調査報告会」で調査内容を発表（佐野2007・2008ｃ）したほか、各年度の調査内容については、小・中・高校の課外学習や各種講習会において発表し、調査内容の周知・情報発信につとめた。なお、平成21年度は7月から3回、NPO法人つがる縄文の会主催の発掘体験ツアーを実施し、各回とも数十名ずつの参加者があった。

写真1-2　2009（平成21）年度 発掘体験で石槍を発見した小学生

写真1-3　2009（平成21）年度 調査参加者

第2章　平成19（2007）年度の調査

2-1　調査概要

調査では、厚い所では10mにも及ぶ砂丘砂を除去すると、10世紀前半とされる白頭山苫小牧火山灰（B-Tm）降灰以後の10世紀後半～11世紀前葉と考えられる1,000m²に及ぶ色跡と、中期後葉～後期を中心とする縄文時代中期～晩期に及ぶ100基ほどの遺構群が確認された。平安時代、縄文時代の遺構とも、斜度20°前後を測る西から東に向けた急斜面上に設けられている。土砂採取により、すでに消滅している本調査区の西側には地形の平坦面があり、平安時代及び縄文時代の集落の中心がここに位置していたのではないかと推測され、今回発見された遺構群は、この集落の東側外縁部を形成するものと考えられた。また、本調査地点南半分では、縄文時代晩期に西側の地形平坦面から人為的に土砂を流し込んで形成した盛土が位置しており、ローム土などを盛り上げた盛土層の厚さは、1m程度に及ぶ所もあった。

遺物は縄文土器がほとんどで、盛土内やその前後の層よりその多くが出土した。西側の平担面から東側斜面に向かい投げ込まれたような出土状況を呈し、出土量の割には形状を復元して図示できるものが少なかった。

2-2　地形と層序

1. 地形

調査面は、今回の調査区付近を頂部（標高20m弱）とし、東に向かい緩やかに標高を減じる丘陵であった。しかし、厚い砂丘砂を除去すると、調査地点付近は東向きの急斜面となっていた。砂丘砂を除去した段階で現われた平安時代の畠跡の検出面で測った西から東に向かう急斜面の斜度は、実に20°に達していた。また、確認の結果、本調査実施地点（牛渕町鷲野沢29-143の西端付近：図1-2参照）より東は溜池水面レベルより下まで砂丘砂が堆積しており、遺構・遺物が発見出来なかった。

2. 層序

以下のようなⅠ～Ⅹ層までの層序が確認された。

Ⅰ層　：現在の地表を覆う層。樹木や草が繁茂

Ⅱ層　：砂丘砂層。平成19年度本調査地点東半では、堆積厚が10mに達する

Ⅲ'層　：平安時代の畠層。砂層で母材はⅢ層

Ⅲ層　：黒褐色を呈する砂層。いわゆる「クロスナ層」

Ⅳ層　：暗褐色砂層で、10世紀前半に降灰したとされる白頭山苫小牧火山灰（B-Tm）が挟在

Ⅴ層　：黒色を呈する砂層で、縄文晩期～平安時代に堆積

盛土層：4層に分層できる。上から、①**灰白色粘土層**、②**褐色粘土層**、③**黒褐色粘土層**、④**黒色粘土層**、となり、ローム土を用いて形成

Ⅵ層　：黒褐色のシルト。縄文中期末葉～後期の文化層

Ⅶ層　：暗褐色砂層。縄文中期後葉以前の文化層

Ⅷ層　：地山とその直上層との漸移層

Ⅸ層　：橙～明黄褐色を呈するローム粘土層。今回の調査では砂質のところが多い

Ⅹ層　：黄褐色砂層。地山第2層

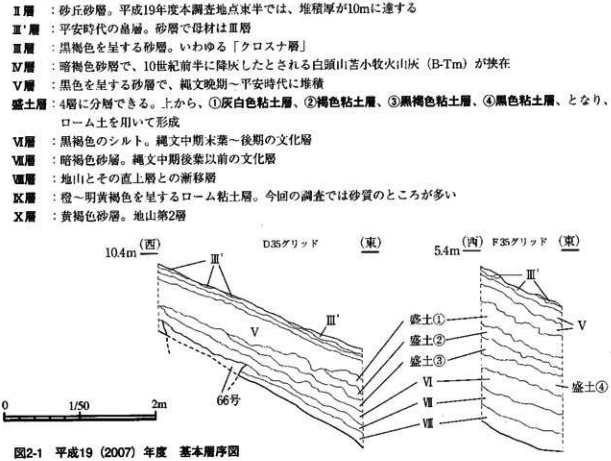


図2-1　平成19（2007）年度　基本層序図

2-3　遺構と遺物

1. 遺物

コンテナ76箱分の出土遺物を得たが、遺物のほとんどが盛土や遺構外出土で、遺構内からの出土遺物は少なかった。遺物包含層や盛土層から出土した遺物は、先述したように西側の平坦面から東側斜面に向かい投げ込まれたような出土状況を呈しており、出土量の割には形状を復元して図示できるものが少なかった。年代的には、平安時代の土師器のほか、縄文中期の円筒上層式土器～晩期の人洞式土器が出土しているが、遺物の主体は、縄文中期後葉の最花式土器～後期初頭の土器であった。

2. 遺構

100基を超える遺構を検出した（表2-1）。平安時代のものは、10世紀前半とされる白頭山苫小牧火山灰（B-Tm）降灰以後の10世紀後半～11世紀前葉と考えられる1,000m²に及ぶ畠跡を確認。また、縄文時代の遺構は、中期中葉、中期後葉～後期初頭、晩期のものが確認されたが、その中心は、中期後葉～後期初頭の遺構群である。

縄文時代の遺構は、土坑・フラスコ状土坑・ピットがその多くを占め、晩期の住居跡なども確認された。また、遺構は地形の東斜面上で、斜度20°にも及ぶ位置に並んでいる。土坑が多いため、今回の調査地点の西側に所在したと考えられる集落の東側外縁部に位置する、貯蔵穴、墓坑などの機能が推測されたが詳細は不明である。なお、遺構として扱ったものの中には、根痕や地形の落ち込みと考えられるものもある。

また縄文晩期の遺構は、竪穴住居跡と推測された12号など、斜面の下位に位置していることが注目された（図2-2）。なお、盛土内の灰白色粘土層上面にピットや土坑らしい掘り込み（51～63号）もみられたが、盛土層上部の落ち込みの可能性もあり、あえて図示はしなかった。

畠跡A～L＜図2-3・2-4＞

図2-3に示すとおり、斜面の傾斜に従い、等高線と直交するように畝立てされた、12面に分類される畠跡を検出した。すべて、白頭山苫小牧火山灰層（Ⅳ層）より上で、砂丘砂に覆われていることから、畝幅や残存する畝立ての高さに差があり、互いに先後関係は有るものの、ほぼ同時期に耕作された畠と考えられた。畠面に植栽痕と思われる痕跡も認められたが、このような斜度20°前後のところで何を栽培したのか、明らかにすることはできなかった。先年、牛潟（2）遺跡で発見した畠跡（佐野2009）や、第3章で述べる平成20年度発見の畠跡と同様、10世紀後半～11世紀前葉の畠跡と判断された。

12号＜竪穴住居跡：図2-5＞

調査区北東部の地山標高5～6m程度の位置で発見した。東側半分は確認出来なかったが、遺構掘り込み面や覆土下位の6層より晩期土器片が出土したこと、床面が平らなこと、推測される平面形から、東西方向に4～5m程度の長軸を持つ縄文晩期の竪穴住居跡と判断した。なお、周囲に位置する縄文晩期の土坑、10・11号、11号bに掘り込まれている。

31号＜土坑：図2-5＞

調査区南東部の地山標高4m強の位置で発見した。不整形な土坑で、南半の1～2層より縄文中期末葉～後期初頭の深鉢形土器の胴部～底部（図2-7-12）が出土した。付近に土坑内ピットが見られるため、この土器は元来ここに据えられていた埋設土器だった可能性も考えられたが、遺構の機能・性格は明らかにできなかった。縄文中期末葉～後期初頭の遺構である。

69号＜土坑：図2-5＞

調査区南半のE35グリッド、地山標高7m付近の位置で発見した。不整形な土坑で、5層より縄文中期の円筒上層d式の深鉢形土器（図2-7-13）が出土したほか、型式不明の中期土器片が少量出土している。遺構の性格は不明だが、縄文中期中葉頃の遺構と考えている。

表2-1　平成19（2007）年度 検出遺構

No.	遺構番号	種別	年代	グリッド	規模(m)			備考
					長軸	短軸	深さ	
1	島A	島跡	平安	E37,F37,F38,G37,G38	－	－	－	
2	島B	島跡	平安	D36,E35,E36,F35,F36	－	－	－	
3	島C	島跡	平安	D34,D35,E34,E35,F34,F35	－	－	－	
4	島D	島跡	平安	C33,C34,D32,D33,D34,E33,E34	－	－	－	
5	島E	島跡	平安	E33,E34,F33,F34	－	－	－	
6	島F	島跡	平安	D33,E33,F33,F34	－	－	－	
7	島G	島跡	平安	D32,D33,E32,E33,F32,F33	－	－	－	
8	島H	島跡	平安	D31,D32,E31,E32,F31,F32	－	－	－	
9	島I	島跡	平安	E29,E30,E31,F29,F30,F31	－	－	－	
10	島J	島跡	平安	F31,F32,F33,G31,G32,G33	－	－	－	
11	島K	島跡	平安	F30,F31,G30,G31	－	－	－	
12	島L	島跡	平安	F29,F30,G29,G30	－	－	－	
13	1号a	土坑	縄文中期	D32	(1.0)	—	0.4	82号に掘り込まれる
14	1号b	土坑	縄文中期	D32	0.9	—	0.5	
15	2号	円形周溝	縄文晩期？	E37,E38	3.0	—	0.7	3号に関係？
16	3号	埋設土器	縄文晩期	E38	0.5	—	0.3	2号に付属？
17	4号	土坑	縄文中期？	D37	1.3	—	0.4	
18	5号	土坑	縄文中期～後期初頭	E38	0.9	—	0.4	
19	6号	土坑	縄文中期	E38,F38	1.5	—	0.4	
20	7号	土坑	縄文中期	C35	(1.3)	—	0.8	
21	8号	土坑	縄文中期～後期	C35,D35	1.2	—	0.9	
22	9号	フラスコ状土坑	縄文中期～後期	D35	1.3	1.2	0.7	底面にPitが付属
23	10号	土坑	縄文晩期	F30	2.0	—	1.1	11号を掘り込む
24	11号	土坑	縄文晩期	F29,F30	1.5	—	1.2	12号を掘り込み、10号に掘り込まれる
25	11号b	土坑	縄文晩期	F29,F30	(1.2)	—	0.8	
26	12号	竪穴住居跡	縄文晩期	F29,F30,G29,G30	(4.0)	—	1.4	10号、11号に掘り込まれる
27	13号	土坑	縄文中期後葉～後期	F38,F39	2.5	—	1.0	
28	14号	Pit	縄文中期後葉～後期	F39	0.2	—	0.2	13号に付属
29	15号	土坑	縄文中期末葉～後期初頭	D37,E37	1.5	—	0.8	
30	16号	土坑	縄文中期～後期	E37	2.1	—	0.3	17号を掘り込む
31	17号	土坑	縄文中期～後期	E37	1.6	—	0.4	16号に掘り込まれる
32	18号a	土坑	縄文中期～後期	E37	1.0	—	0.6	19号を掘り込む
33	18号b	土坑	縄文中期～後期	E37	(0.9)	—	0.4	18号aに掘り込まれる
34	19号	土坑	縄文中期末葉～後期初頭	E37	1.8	—	0.6	
35	21号	Pit	縄文中期～後期	E36,E37	0.5	—	0.2	
36	22号	Pit	縄文中期～後期	D37	0.4	—	0.2	
37	23号	土坑	縄文中期	E36	1.8	—	0.5	24号に掘り込まれる
38	24号	土坑	縄文中期～後期	E36	1.2	—	0.4	25号、26号を掘り込み、47号に掘り込まれる
39	25号	土坑	縄文中期～後期	E36	1.4	—	0.8	24号、47号に掘り込まれる
40	27号	フラスコ状土坑	縄文中期～後期	F37	1.1	1.0	0.6	
41	28号	Pit	縄文中期	F37	0.5	—	0.2	
42	29号	Pit	縄文中期	F37	0.3	—	0.2	
43	30号	土坑	縄文中期～後期	F37	0.8	—	0.4	
44	31号	埋設土器	縄文中期末葉～後期	F36,F37,G37	0.9	—	0.6	底面にPitが付属
45	32号	土坑	縄文中期～後期	F37	0.7	—	0.3	
46	33号	土坑	縄文中期末葉～後期初頭	F36	0.7	—	0.2	34号を掘り込む
47	34号	土坑	縄文中期末葉～後期初頭	F36	1.1	—	0.5	33号に掘り込まれる
48	35号	土坑	縄文中期～後期	F36,F37	1.7	—	0.7	36号、37号を掘り込む
49	36号	土坑	縄文中期～後期	F37	1.2	—	0.6	35号に掘り込まれる
50	37号	土坑	縄文中期～後期	F36	1.1	—	0.6	35号に掘り込まれる
51	38号	土坑	縄文中期～後期	F36	1.1	—	0.5	40号、41号を掘り込む
52	39号	土坑	縄文中期～後期	E36	(1.2)	—	0.9	40号、41号を掘り込む
53	40号	土坑	縄文中期～後期	E36,F36	(1.2)	—	0.7	38号、39号に掘り込まれる
54	41号	Pit	縄文中期～後期	F36	0.6	—	0.4	38号、39号に掘り込まれる
55	42号	土坑	縄文中期末葉～後期初頭	E36	1.4	—	0.8	
56	43号	土坑	縄文中期末葉～後期初頭	F36	0.8	—	0.7	44号を掘り込む
57	44号	土坑	縄文中期末葉～後期初頭	F36	1.0	—	0.3	43号に掘り込まれる

No.	遺構番号	種別	年代	グリッド	規模(m)			備考
					長軸	底径	深さ	
58	45号	フラスコ状土坑	縄文中期末葉～後期初頭	E36	1.3	1.1	0.7	
59	46号	土坑	縄文中期末葉～後期初頭	E36	1.2	—	0.9	
60	47号	土坑	縄文中期末葉～後期初頭	E36	1.7	—	1.0	24号、25号、48号を掘り込む
61	48号	土坑	縄文中期末葉～後期初頭	E36	0.9	—	0.5	47号に掘り込まれる
62	49号	Pit	縄文晩期	E35	0.5	—	0.3	掘り込み面は灰白色粘土層上面
63	50号a	土坑	縄文中期末葉～後期	E35	1.7	—	0.4	50号bを掘り込む
64	50号b	土坑	縄文中期	E35	1.6	—	1.0	50号aに掘り込まれる
65	51号	土坑	縄文晩期	E33,F33,F34	0.9	—	0.5	掘り込み面は灰白色粘土層上面
66	52号	Pit	縄文晩期	F34	0.4	—	0.3	掘り込み面は灰白色粘土層上面
67	53号	Pit	縄文晩期	F34	0.6	—	0.4	掘り込み面は灰白色粘土層上面
68	54号	Pit	縄文晩期	F34	0.3	—	0.3	掘り込み面は灰白色粘土層上面
69	55号	Pit	縄文晩期	E34,F34	0.3	—	0.3	掘り込み面は灰白色粘土層上面
70	56号	Pit	縄文晩期	F34	0.2	—	0.2	掘り込み面は灰白色粘土層上面
71	57号	Pit	縄文晩期	E34	0.3	—	0.4	掘り込み面は灰白色粘土層上面
72	58号	Pit	縄文晩期	E34	0.2	—	0.1	掘り込み面は灰白色粘土層上面
73	59号	Pit	縄文晩期	E34	0.3	—	0.3	掘り込み面は灰白色粘土層上面
74	60号	Pit	縄文晩期	E34	0.2	—	0.2	掘り込み面は灰白色粘土層上面
75	61号	土坑	縄文晩期	E34	0.5	—	0.2	掘り込み面は灰白色粘土層上面
76	62号	Pit	縄文晩期	E34	0.2	—	0.2	掘り込み面は灰白色粘土層上面
77	63号	Pit	縄文晩期	E34	0.2	—	0.1	掘り込み面は灰白色粘土層上面
78	64号	土坑	縄文後期～晩期？	E35	(1.4)	—	1.0	掘り込み面は黒色粘土層上面
79	65号	土坑	縄文後期～晩期？	E34,E35	(1.2)	—	0.8	掘り込み面は黒色粘土層上面
80	66号	フラスコ状土坑	縄文中期末葉～後期	D34,D35	1.0	0.9	0.8	底面にPitが付属
81	67号	土坑	縄文中期後葉	D35	(1.3)	—	0.9	68号aを掘り込む
82	68号a	土坑	縄文中期後葉	D34,D35,E34,E35	1.1	—	0.5	68号bを掘り込み、67号に掘り込まれる
83	68号b	土坑	縄文中期後葉	D34,E34,E35	1.0	—	0.4	68号aに掘り込まれる
84	69号	土坑	縄文中期中葉？	E35	1.3	—	0.7	
85	71号	土坑	縄文中期～後期	D35,E35	1.2	—	1.0	
86	72号	土坑	縄文中期～後期？	F35	0.9	—	0.4	
87	73号	土坑	縄文中期	E32	0.9	—	0.5	
88	74号	土坑	縄文中期	E32	1.0	—	0.6	
89	75号	土坑？	縄文中期	D32	2.3	—	0.6	
90	76号	埋設土器	縄文晩期？	D32,D33	1.0	—	0.4	
91	77号	土坑	縄文中期初頭～中葉	C34,D34,D35	1.5	—	0.9	
92	78号	土坑	縄文中期？	D34	1.1	—	0.7	
93	79号	土坑	縄文中期	D34	1.3	—	0.7	
94	80号	土坑	縄文中期～後期？	D33,D34	1.7	—	0.5	
95	81号	土坑	縄文中期中葉	D33	1.3	—	0.6	円施上層e武検階
96	82号	土坑？	縄文中期末葉～後期	D32	(1.3)	—	0.3	1号を掘り込む
97	83号	土坑	縄文中期	D34	1.2	—	0.9	
98	84号	土坑	縄文中期中葉	D33	1.4	—	0.6	
99	85号	土坑？		D33,E33	1.1	—	0.5	
100	86号	土坑？	縄文中期～後期	D33	1.4	—	0.5	
101	87号	土坑	縄文中期～後期	D33,E33	1.6	—	0.7	
102	88号	土坑	縄文中期	C34	0.9	—	0.4	
103	89号	土坑	縄文中期～後期？	C34	1.1	—	0.4	
104	90号	土坑	縄文中期～後期？	E33,F33	1.0	—	0.5	
105	91号	土坑	縄文中期～後期	F33	1.1	—	0.5	
106	92号	土坑	縄文中期～後期	F33,F34	1.5	—	0.5	93号を掘り込む
107	93号	土坑	縄文中期～後期	F33	(1.1)	—	0.6	92号に掘り込まれる
108	94号	土坑	縄文中期～後期	F34	1.0	—	0.5	
109	95号	土坑？	縄文中期～後期	E34	1.4	—	0.8	95号bを掘り込む
110	95号b	土坑	縄文中期～後期	E33,E34	1.2	—	0.9	96号、97号を掘り込み、95号に掘り込まれる
111	96号	土坑	縄文中期～後期	E33,E34,F33,F34	1.5	—	0.5	95号、95号b、97号に掘り込まれる
112	97号	土坑	縄文中期～後期	E33,F33	(1.9)	—	0.8	96号を掘り込み、95号bに掘り込まれる
113	98号	土坑	縄文中期～後期	E34,E35	1.1	—	0.7	
114	99号	土坑	縄文中期中葉	D33	1.3	—	0.8	
115	100号	フラスコ状土坑	縄文中期	D33	1.2	1.0	0.8	底面にPitが付属
116	101号	土坑	縄文中期～後期	D32,D33	1.4	—	0.6	
117	102号	土坑？	—	E33,E34	0.9	—	0.4	
118	103号	土坑？	—	E33,E34	(0.8)	—	0.5	
119	104号	土坑	縄文中期～後期	D34	1.1	—	0.5	
120	105号	土坑	縄文中期～後期	E34	1.2	—	0.4	106号を掘り込む
121	106号	土坑	縄文中期～後期	E34	1.0	—	0.4	105号に掘り込まれる
122	107号	土坑	縄文中期～後期	E34	0.9	—	0.4	
123	108号	Pit	縄文晩期	F29	0.6	—	0.8	

（ ）：切り合い関係や調査区の関係から本来の規模や形状を復元できない遺構の計測値

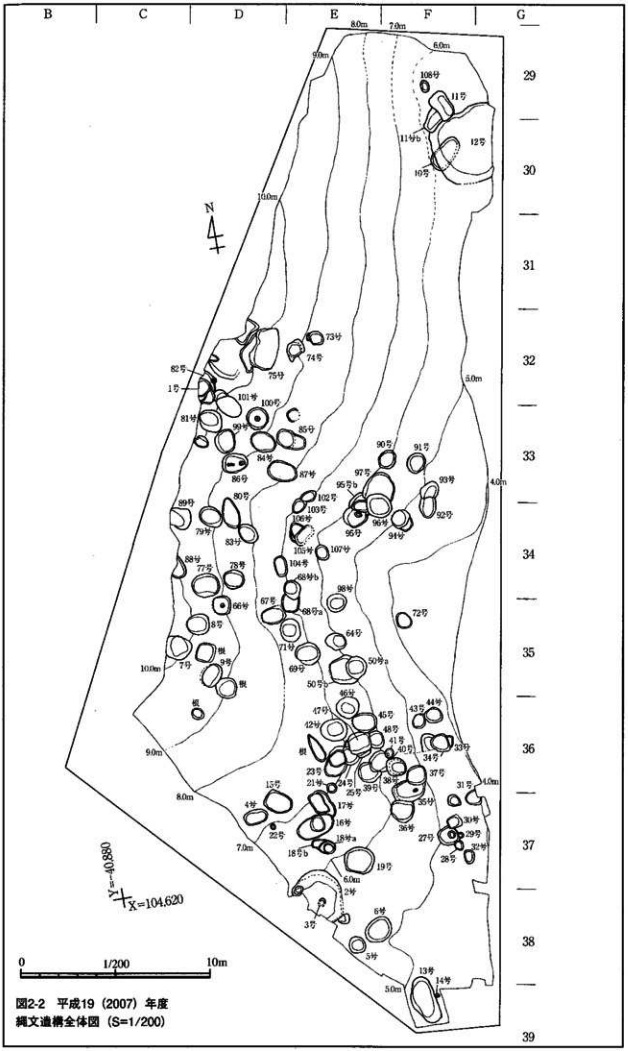


図2-2　平成19（2007）年度
縄文遺構全体図（S=1/200）

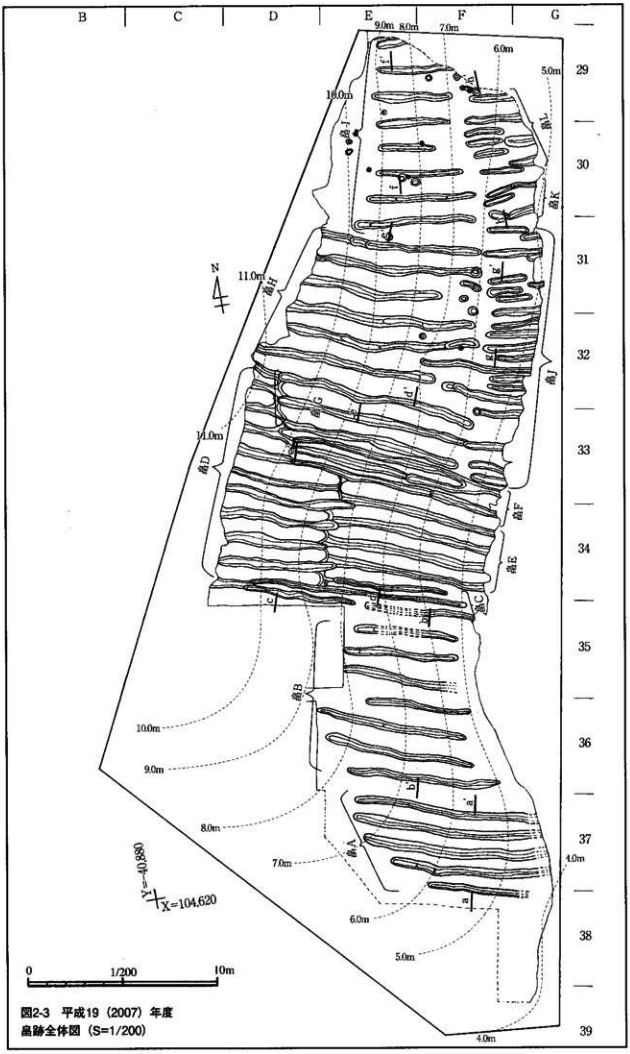


図2-3　平成19（2007）年度
畠跡全体図（S=1/200）

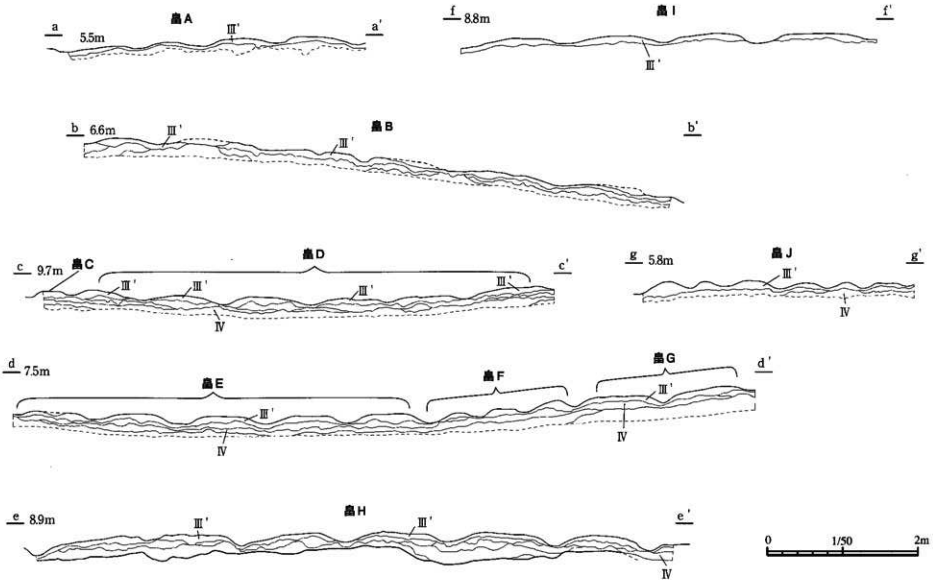
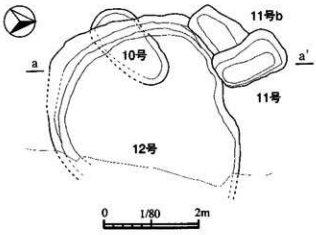


図2-4　平成19（2007）年度　島跡土層断面図（S=1/50）



10号

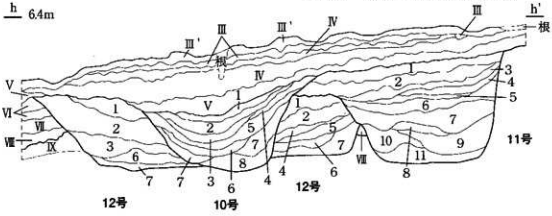
1	黒褐色土	[10YR2/2]	黄褐色砂粒混入、褐鉄鉱・炭化物少量。しまり良
2	暗褐色土	[10YR3/3]	黄褐色砂粒混入、褐鉄鉱・炭化物少量。しまり良
3	黒褐色土	[10YR3/2]	黄褐色砂粒混入、褐鉄鉱・炭化物中量、焼成粒少量。しまり良
4	褐褐色土	[10YR3/4]	黄褐色砂粒混入、黄褐色砂ブロック・炭化物少量。しまり良
5	暗褐色砂	[10YR3/3]	炭化物少量
6	炭化物		黒褐色砂・灰混入、褐鉄鉱少量、焼成粒・粘性良
7	黒褐色砂	[10YR3/2]	6層上が混入、炭化物・褐鉄鉱少量

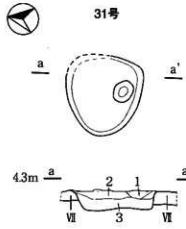
11号

1	灰黄褐色砂質土	[10YR4/2]	黄褐色砂混入、炭化物・褐鉄鉱少量。しまり良
2	にぶい黄褐色砂質土	[10YR4/3]	炭化物少量。しまり良
3	暗褐色砂質土	[10YR3/4]	黄褐色砂混入、炭化物少量。しまり良
4	焼土・炭化物		3層上混入
5	にぶい黄褐色砂	[10YR5/4]	6層上混入、褐鉄鉱・炭化物少量
6	灰黄褐色砂	[10YR4/2]	褐鉄鉱少量、炭化物微量
7	にぶい黄褐色砂	[10YR5/4]	6層十混入、炭化物少量
8	黒褐色砂質土	[10YR2/3]	黄褐色砂混入、炭化物・褐鉄鉱微量。粘性・しまり良
9	にぶい黄褐色砂	[10YR5/4]	酸化鉄混入
10	暗褐色砂	[10YR3/4]	黄褐色砂ブロック混入、炭化物・褐鉄鉱微量
11	灰白色砂	[10YR7/1]	酸化鉄混入、炭化微量有

12号

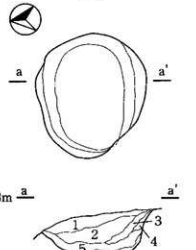
1	暗褐色砂質土	[10YR3/4]	炭化物・褐鉄鉱少量。しまり良
2	暗褐色砂質土	[10YR3/3]	黄褐色砂ブロック混入、炭化物・褐鉄鉱少量。しまり良
3	暗褐色砂	[10YR3/4]	黄褐色砂粒混入、炭化物・褐鉄鉱少量。しまり良
4	黒褐色砂	[10YR2/3]	黄褐色砂混入、炭化物少量
5	褐色砂	[10YR4/4]	黒褐色砂粒土混入、炭化物少量
6	黒褐色砂質土	[10YR2/3]	黄褐色砂混入、炭化物少量。しまり良
7	褐色砂	[10YR4/4]	暗褐色砂粒子混入
8	黒褐色砂	[10YR3/2]	黄褐色砂混入、炭化物少量。しまり良





31号

1	灰黄褐色粘土	[10YR5/2]	砂混入
2	褐色粘土	[10YR5/4]	砂混入
3	暗灰色粘土	[10YR5/1]	砂混入



69号

1	黒褐色土	[10YR3/2]	黄褐色砂・炭化物少量
2	褐色土	[10YR3/3]	黄褐色砂混入、炭化物少量。しまり良
3	黒褐色土	[10YR2/3]	黄褐色砂多量、炭化物少量。しまり良
4	黒褐色土	[10YR2/3]	黄褐色ローム粒子混入、炭化物微量。しまり良
5	暗褐色土	[10YR3/4]	黄褐色砂少量、炭化物少量
6	明黄褐色砂質土	[10YR6/6]	5層と黒褐色の混移

0 1/40 1m

図2-5 平成19（2007）年度 縄文時代の住居跡・土坑（S=1/40）

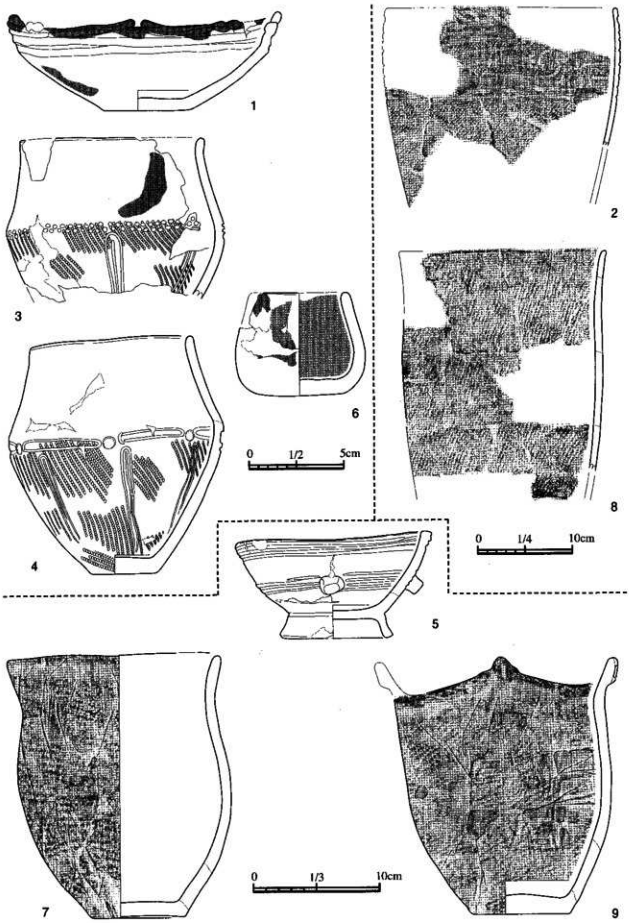


図2-6　平成19（2007）年度　遺構外出土遺物

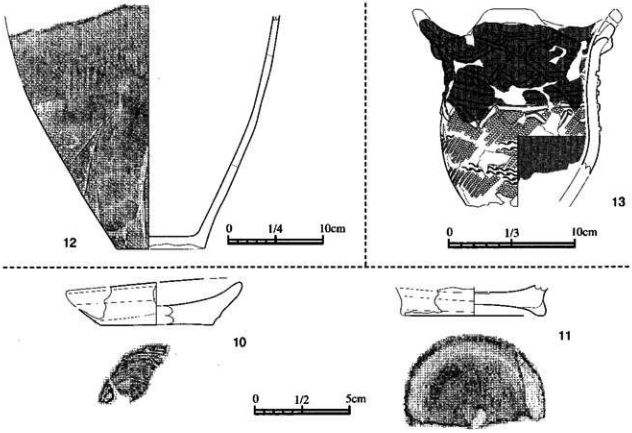


図2-7 平成19（2007）年度 遺構内出土遺物

表2-2 平成19（2007）年度 出土遺物観察表

No.		種別	器形	部位	出土グリッド・遺構	出土層位	年代	型式・石材	備考
図2-6	1	縄文土器	浅鉢	口縁～底部	E37	V層	縄文晩期後葉	大洞A	
図2-6	2	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	F30	V層	縄文晩期前葉	大洞B	
図2-6	3	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	E35	褐色粘土層	縄文中期後葉	最花	
図2-6	4	縄文土器	深鉢	口縁～底部	F35	褐色粘土層	縄文中期後葉	最花	
図2-6	5	縄文土器	台付浅鉢	口縁～底部	E35	黒褐粘土層	縄文晩期一弥生	大洞一砂沢?	
図2-6	6	縄文土器	壺	口縁～底部	F35	VI層	縄文晩期	大洞	赤彩
図2-6	7	縄文土器	壺	口縁～底部	F36	VI層	縄文中期末葉	大木10	
図2-6	8	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	F36	VI～VII層	縄文中期中葉～後期初頭	—	
図2-6	9	縄文土器	深鉢	口縁～底部	F36	VII層	縄文中期中葉	円筒上層e	
図2-7	10	土師器	皿	口縁～底部	畠L	III'層	平安	—	
図2-7	11	土師器	台付杯	底部	畠L	III'層	平安	—	
図2-7	12	縄文土器	深鉢	胴部～底部	31号	1～2層	縄文中期末葉～後期初頭	—	
図2-7	13	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	69号	5層	縄文中期中葉	円筒上層d	

第3章　平成20・21（2008・2009）年度の調査

3-1　調査概要

平成20年6月、調査地点北部の標高28m強を測る砂丘の砂は厚く、最も厚い所では5mに及んだ。地表面からみる調査区の地形は、南部の平坦面から北に向かい標高が増し、比較的急な上り坂になっていたのだが、砂丘砂を剥いだ結果、地形は逆に、南部の平坦面から北に向け緩やかに傾斜してゆくこととなった。

砂丘砂の直下からは、平成19年度同様、10世紀前半とされる白頭山苫小牧火山灰（B-Tm）降灰以後の10世紀後半～11世紀前葉と考えられる約1,500m²に及ぶ畠跡が頭をのぞかせた。また南部には縄文前期末葉～中期後葉の遺構群が確認された。20年度は、畠跡と南部の縄文遺構の調査だけで手一杯であり、北部の畠跡下の縄文遺構の調査は、21年度に繰り越した。20年度と21年度の遺構番号を連番とし、一括してここに報告する所以である。

21年度は、畠跡の下の白頭山苫小牧火山灰（B-Tm）降灰以前の平安時代遺構のほか、地山面では縄文時代前期末葉～中期の円筒土器文化期の遺構群が発見された。縄文時代の遺構は、北に向かう緩斜面上～調査区北端部の平坦面部分にかけ、フラスコ状土坑をはじめとする土坑群をメインとして、土坑墓・竪穴住居跡・埋設土器等が分布していた。また、G8～M9～G11グリッド付近では、縄文中期～晩期初頭くらいまでの盛土が形成されていた（図3-1）。

なお、平成20・21年度の調査で検出した遺構群は、今回の調査地点南部と調査地点が一部重複する、かつての新谷雄蔵氏らの調査（新谷ほか1990ほか）で確認された10数軒に及ぶ竪穴住居跡をはじめとした集落跡の年代（表3-2）と矛盾せず、今回の縄文時代の遺構群は、この竪穴住居跡に居住した人々が残したものということができる。

また、遺物は縄文前期末葉～晩期の土器、平安時代の土師器などが出土した。遺物は、主に縄文時代の遺構内から出土し、その主体は円筒土器、特に縄文前期末葉の円筒下層d1式土器であった。

3-2　地形と層序

1. 地形

前述のように、調査前の地形は、南部の平坦面から北に向かい標高が増す比較的急な上り坂となっていたが、砂丘砂を剥ぐと地形は逆に、南部の平坦面から北に向け緩やかに傾斜し、北端部付近は比較的平担な状態となっていた。畠跡を剥がしたあとの地山面の地形も大枠で同様であった。

2. 層序

以下のようなⅠ～Ⅻ層までの層序が確認された。

Ⅰ層：客土層

Ⅱ層：黒色砂層。元来の地表面

Ⅲ層：砂丘砂層。調査区北部では、堆積厚が5mに達する

Ⅳ層：畠層。砂丘砂が混入する黒褐色砂～砂質シルト層

Ⅴ層：黒褐色砂質シルト層。下位に白頭山苫小牧火山灰（B-Tm）を微量含む

Ⅵ層：10世紀前半降灰とされる白頭山苫小牧火山灰（B-Tm）を挟在する黒褐色砂質シルト層

Ⅶ層：縄文晩期～平安時代以前に堆積した褐色シルト層

Ⅷ層：縄文後期～晩期初頭頃の盛土層。ローム土が主な母材。暗褐色シルト質粘土層

Ⅸ層：縄文中期～後期頃の盛土層。ローム土が主な母材。暗褐色粘土層

Ⅹ層：縄文中期以前の盛土層。ローム土が混入する黒褐色粘土層

Ⅺ層：縄文前期末葉頃の文化層。暗褐色シルト層

Ⅻ層：縄文前期以前の文化層。黒褐色シルト～粘土層

XⅢ層：黒褐色粘土層。無遺物層

XⅣ層：地山とその直上層の漸移層

XⅤ層：橙色～明褐色ローム粘土層（地山1層）

XⅥ層：明黄褐色を呈する砂まじり粘土層（地山2層）

XⅦ層：黄褐色砂層（地山3層）

3-3　遺構と遺物

1. 遺物

平成20年度はコンテナ15箱分、21年度は190箱分の出土量があったが、21年度の遺物の多くは、縄文前期末葉フラスコ状土坑から出土したヤマトシジミの貝殻である。縄文前期末葉の円筒下層d1式土器～縄文晩期の大洞式土器、平安時代の須恵器・土師器なども出土したが、その主体は円筒土器、特に縄文前期末葉の円筒下層d1式土器であった。なお、遺物のほとんどは遺構内からの出土である。

2. 遺構

平成20・21年度で100基を超える遺構を確認した（表3-1）。平安時代の遺構は、1,500m²に及ぶ10世紀後半～11世紀前葉の畠跡と、白頭山苫小牧火山灰（B-Tm）降灰以前の溝状遺構などを検出。縄文時代の遺構は、フラスコ状土坑をはじめとする土坑群をメインとして、土坑墓・竪穴住居跡・埋設土器等を検出した。縄文時代の遺構の年代は、前期末葉～中期後葉がそのほとんどを占め、その中心は、縄文時代前期末葉～中期中葉の円筒土器文化期の遺構群であった。

なお、縄文時代の遺構群は、図3-1に示すように平成元～9年の調査で発見された住居跡群（新谷ほか1990ほか）の周辺の平坦面～北向きの緩斜面上に分布するもの、調査区北端部の平坦面に位置するものに二分される。なお、これらの間に年代や遺構の性格について、明確な差は見られなかった。

（平安時代の遺構）

畠跡A～P＜図3-2・3-3＞

調査区北部で厚い砂丘砂を剥ぎ取った直下より、面積約1,500m²に及ぶ16面の畠跡を確認した。地形的には調査区北部の北向きの緩斜面～北部の平坦面にかけ分布しており、北向き緩斜面上の畠跡は、傾斜に従い等高線と直交するように南北方向に畝立てされており、平坦面上の畠跡はこれと直交するように東西方向に畝立されていた。これら16面の畠跡には多少の先後関係はみてとれたが、ほぼ同時期のものであり、すべて砂丘砂に直接被覆され、白頭山苫小牧火山灰層の上に構築されていることや、出土遺物等からも判断して、10世紀後半～11世紀前葉の畠跡と考えている。ゆえに先述した平成19年度に発見された畠跡や、先年牛潟（2）遺跡遺跡で発見された畠跡（佐野2009）と同時期のものである。しかし、この畠跡でも何を栽培していたのか、明らかにすることはできなかった。

なお、畠跡北部には、畠跡直上に4本の溝跡（畠上溝A～D）が確認されたが、年代が畠跡廃絶以後の平安時代ということ以外、機能・性格等は不明である。

59号＜溝状遺構：図3-4＞

調査区北部のF4～F7グリッドにかけて、南北方向に展開する溝状遺構である。底面に連続してピットが掘り込まれ、これらが棒状のものを立てた跡と考えられたことから、柵列の掘り方ではないかと推定している。Ⅶ層を掘り込み、白頭山苫小牧火山灰層（Ⅵ層）に被覆されているため、10世紀前半以前の平安時代の遺構と考えられた。

66号＜炉跡？：図3-4＞

H9グリッドに位置する。鉄関係の炉跡のようなつくりであるが、周囲から鉄滓等は出土していない。白頭山苫小牧火山灰層（Ⅵ層）に被覆されているため、10世紀前半以前の平安時代の遺構と考えられたが、機能・性格は不明。

（縄文時代の遺構）

1号＜竪穴住居跡：図3-5＞

L11グリッド付近に位置する。平成9年の調査で「15号住居跡」として西側の一部が調査されている。東西7m、南北6mほどの規模を持ち、4つの柱穴によって上屋を支える構造で、中央に炉跡を持つ。また北東部に「出入口」と考えられるステップ（高まり）が見つかった。周辺の小規模なピットは、本住居跡に関係する施設と考えられた。なお、1度建てかえが行われている。床面付近から少量の円筒下層d1式土器片を得ていることから、縄文前期末葉の竪穴住居跡と判断した。

22号＜竪穴住居跡：図3-6＞

E18・19グリッド付近に位置する。南北5.5m、東西4mほどの規模を持つ。円筒上層式土器段階の土坑（31・32号）上部を削平して構築されており、床面中央部に石囲炉（炉跡1）と地床炉（炉跡2）を備えている。遺物は、覆土上層～下層にかけ、最花式土器等の細片が出土している。縄文中期後葉の竪穴住居跡と判断された。

84号＜竪穴住居跡：図3-7＞

C11グリッド付近に位置する。南北4mほどの規模を持つ。縄文前期の土坑（85号）の上部を削平して構築されており、床面中央部に土器埋設炉を備えている。遺物は、床面直上より円筒上層d式土器などが出土している（図3-23-4～8）。縄文中期中葉頃の竪穴住居跡と判断された。

164号＜竪穴住居跡：図3-7＞

C9～10グリッド付近に位置する。南北5mほどの規模を持つが西側半分は確認出来ていない。縄文前期の土坑（161号）の上部を削平して構築されている。また周囲のピットは、本遺構に伴うものと考えられた。建て直しが行われたと考えられ、新旧2面の床面が確認出来た。遺物は出土していない。新旧164号とも縄文中期の円筒土器文化段階の竪穴住居跡と判断された。

13号＜フラスコ状土坑：図3-8＞

G19グリッド付近に位置する。縄文中期の土坑（14号）を掘り込んでいる。1.5mほどの深さで、最下層より縄文中期後葉の最花式土器（図3-24-9）が出土しているため、この段階の遺構と判断された。

16号＜土坑：図3-8＞

E16グリッド付近に位置する。西側に位置する16号bは、16号に付属する施設と考えられた。覆土3層より縄文中期後葉の最花式土器と石槍（図3-24-10・11）が人為的な状況で埋設されていたため、墓坑とも考えたが、遺構の機能・性格は不明である。年代的には縄文中期後葉の遺構である。

18号＜土坑：図3-9＞

D15グリッド付近に位置する。西側に位置する18号bは、18号に付属する施設と考えられた。覆土3層より縄文中期後葉の最花式土器（図3-24-13）などが出土したほか、遺構覆土9層を掘り込んで最花式土器の口縁部（図3-24-14）が倒立した状態で埋設されていた（18号内埋設土器）。おそらく18号が人為的に埋積される段階で行われた行為と思われるが、その目的は不明である。年代的には縄文中期後葉段階の遺構と判断した。

20号＜フラスコ状土坑：図3-10＞

E18グリッド付近に位置する。1.3mほどの深さで、覆土12層より円筒上層d式土器（図3-24-15）が出土した。縄文中期中葉頃の遺構と判断された。

23号＜フラスコ状土坑：図3-10＞

D13グリッド付近に位置する。1.4mほどの深さで、底面に中央のピットを中心として十字に溝が切られていた。遺物は覆土8層より円筒下層d1式土器（図3-25-16）が出土している。縄文前期末葉頃の遺構と判断され、周囲の24・27号とほぼ同段階の遺構と考えられた。

33号＜フラスコ状土坑：図3-11＞

B13グリッド付近に位置する。1.5mほどの深さで、底面に中央のピットを中心としてT字に溝が切られていた。遺物は円筒下層d1式土器等が出土している。縄文前期末葉頃の遺構と判断された。

34号＜フラスコ状土坑：図3-11＞

C13グリッド付近にあり、西側に33号が位置する。1.4mほどの深さで、遺物は円筒下層d1式土器等が出土している。縄文前期末葉頃の遺構と判断された。

35号＜フラスコ状土坑：図3-11＞

C13グリッド付近にあり、西側に34号が位置する。1.5mほどの深さで、底面中央に1基と底面壁際に5基のピットがある。遺物は覆土中層より円筒下層d1式土器（図3-25-17）等が出土している。縄文前期末葉頃の遺構と判断された。

36号＜フラスコ状土坑：図3-11＞

B12グリッド付近にあり、南側に33号が位置する。1.6mほどの深さで、底面にピットや溝などはない。遺構西側上部は、過去の土砂採取により一部削平されている。遺物は円筒下層d1式土器等が少量出土している。縄文前期末葉頃の遺構と判断された。

37号<フラスコ状土坑：図3-12>

C12グリッドに位置する。1.8mほどの深さで、底面中央に1基と底面壁際に4基のピットがある。遺物は、覆土下位より円筒下層d2式土器（図3-25-18）が出土したほか、9層下位よりヤマトシジミの貝殻が少量出土した。年代的には縄文前期末葉頃の遺構と判断された。

38号<フラスコ状土坑：図3-12>

C12グリッド付近に位置する。1.2mほどの深さで、底面中央に1基ピットがある。遺物は、上層より円筒下層d1式土器が出土したほか、最上層より縄文中期後葉～後期初頭と考えられる土器片も少量出土した。年代的には縄文前期末葉頃の遺構と推定したが、これよりも新しい年代の可能性もある。

39・40号<フラスコ状土坑・土坑：図3-12>

D12グリッドに位置し、39号が40号を掘り込んでいる。40号は円筒下層式土器片が少量出土したため、縄文前期の遺構と推定された。

39号は底面中央に1基、底面西側壁際に2基ピットがあるほか、底面中央ピットから南北にのびる溝が切られていた。遺物は、円筒下層d1式土器片のほか、覆土上層より円筒上層d式土器片が少量見られた。年代的には縄文前期末葉頃の遺構と推定したが、これよりも新しい年代の可能性もある。

42号<フラスコ状土坑：図3-13>

D12グリッド付近に位置する。1.5mほどの深さで、底面中央に1基ピットがあるほか、ピットから西にのびる溝が切られていた。遺物は、円筒下層d1式土器片が少量出土した。縄文前期末葉頃の遺構と判断された。

43号<フラスコ状土坑：図3-13>

B12グリッド付近に位置する。1.6mほどの深さで、底面中央に1基ピットがある。覆土8・10・12層がほぼヤマトシジミ100%の貝層となっており、イシガイが極少量確認出来た。貝の量は500kg積載小型トラック2台分に達し、後述する45号出土の貝殻とともに、平成21年度出土遺物の大部分を占めている。これらの貝殻は、本遺構の廃絶後に人為的に廃棄されたものと考えられた。また、貝層の上の覆土はしまりがよく、一気に埋め戻して遺構の穴をパックしたような土層のあり方を呈していた。おそらく食料に供された後の貝殻には、取りきれない貝肉部分が残存しており、地表に放置したような状況で廃棄すると、いずれ悪臭を放つため、使われなくなった土坑内に食後の貝殻を入れ、土をかけてパックするというような「ごみ処理」ないしは「悪臭対策」がなされたのではないだろうか。つまり43号は、最終的には「ごみ穴」に転用されたと考えられた。このほかの遺物は、円筒下層d1式土器片や剥片石器（図3-25-19・20）等が少量出土した。縄文前期末葉頃の遺構と判断している。

45号<フラスコ状土坑：図3-13>

C11グリッド付近に位置し、すぐ南隣には前述の43号が所在する。1.6mほどの深さで、底面中央に1基ピットがある。覆土7層がほぼヤマトシジミ100%の貝層となっており、イシガイやアワビが極少量確認出来た。貝殻の量は500kg積載小型トラック2台分に達し、前述した43号出土の貝殻とともに、平成21年度出土遺物の大部分を占めた。これらの貝殻は、43号同様、45号が廃絶後に「ごみ穴」に転用された際に人為的に廃棄されたものと考えられた。また、貝層の上の覆土はしまりがよく、一気に埋め戻して遺構の穴をパックするような土層のあり方を呈していた。43号同様、食料に供された後の貝殻に残る貝肉部分から発生する悪臭を防止するための「ごみ処理」「悪臭対策」がなされた遺構ではないだろうか。このほかの遺物は、円筒下層d1式土器片や石器（図3-25-21・22）等が少量出土した。縄文前期末葉頃の遺構と判断している。

46号<フラスコ状土坑：図3-14>

C11・12グリッドに位置する。1.4m弱の深さで、底面中央に1基ピットがある。遺物は、円筒下層d1式土器（図3-25-23）などが出土した。縄文前期末葉頃の遺構と判断された。

49号<フラスコ状土坑：図3-14>

F11グリッドに位置する。1.5m弱の深さで、底面中央に1基ピットがある。遺物は、円筒下層d1式土器などが少量出土した。縄文前期末葉頃の遺構と判断された。

50号<フラスコ状土坑：図3-14・15>

F11グリッド付近に位置する。2m弱の深さで、底面中央に1基ピットがある。遺物は、円筒下層d2式土器（図3-26-24）などが少量出土した。縄文前期末葉頃の遺構と判断された。

51号<フラスコ状土坑：図3-14・15>

G11グリッドに位置する。2m弱の深さで、底面中央に1基ピットがある。遺物は、円筒下層d1式土器などが少量出土した。縄文前期末葉頃の遺構と判断された。

52号<フラスコ状土坑：図3-14・15>

G11グリッドに位置する。2m弱の深さで、底面中央に1基ピットがある。遺物は、遺構確認面付近より円筒下層d1式土器が少量出土した。縄文前期末葉頃の遺構と推定された。

55号<フラスコ状土坑：図3-15>

E10グリッド付近に位置する。1.7mほどの深さで、底面中央に1基ピットがある。遺物は、円筒下層d1式土器（図3-26-25）などが出土し、縄文前期末葉頃の遺構と推測されたが、覆土上位より円筒上層式土器片がわずかにみられたため、年代が下る可能性も考えられた。

56号<フラスコ状土坑：図3-16>

E11グリッド付近に位置する。1.6mほどの深さで、底面中央に1基ピットがある。遺物は、円筒下層d1式土器などが少量出土し、縄文前期末葉頃の遺構と考えられた。

57号<フラスコ状土坑：図3-16>

F10グリッドに位置する。1.6mほどの深さで、底面には中央付近にピット1基と、これを中心にして放射状にのびる4本の溝が位置している。遺物は、円筒下層d1式土器や石器（図3-26-26）などが少量出土し、縄文前期末葉頃の遺構と考えられた。

58号<フラスコ状土坑：図3-16>

G10グリッドに位置する。1m弱の深さで、底面には中央付近にピット1基が位置している。遺物は、円筒下層d1式土器などが少量出土した。縄文前期末葉頃の遺構と考えられた。

60・150・154号<土坑・土坑・フラスコ状土坑：図3-17>

E5グリッド付近に位置する土坑群で、150号が154号を、60号が150号を掘り込んでいる。150・154号は出土遺物から、縄文前期末葉頃の遺構と考えられた。また60号は縄文前期末葉～中期の遺構と推定されるが、遺構内に複数回にわたり掘削した跡が見られることから、粘土採掘坑ではないかとも推測している。

71・72号<土坑・フラスコ状土坑：図3-17>

C10グリッドに位置し、71号が72号を掘り込んでいる。また、白頭山苫小牧火山灰降灰以前の平安時代の遺構、83号に両遺構とも掘り込まれている。71号からは円筒下層d1式土器など（図3-26-28～29）が出土し、72号からは円筒下層式土器細片が出土した。71号は縄文前期末葉、72号も前期の遺構と判断された。

91号<フラスコ状土坑：図3-17>

D10グリッド付近に位置する。1.4mほどの深さで、底面には中央にピットがあり、そこから南北に1本ずつ溝が切られている。遺物は円筒下層d1式土器など（図3-26-30）が出土した。縄文前期末葉頃の遺構と判断された。

110号<土坑：図3-18>

E9グリッドに位置する。1mほどの深さで、底面には中央にピットがある。遺物は、覆土1層より円筒下層式土器片が1点出土した。縄文前期の遺構と推測された。

120号<土坑：図3-18>

D9グリッドに位置する。1mほどの深さで、遺構南部に舌上の突出がある。遺物は、円筒下層d1式土器片が少量出土した。縄文前期末葉の遺構と判断された。

121号<フラスコ状土坑：図3-18>

C9・D9グリッドに位置する。1.2mほどの深さで、底面中央にピットがある。また周囲のピットは本遺構に関連するものと推定されたが、どのような機能のものかは明らかにできなかった。遺物は、円筒下層式土器片や石器などが少量出土した。縄文前期の遺構と判断された。

135号<フラスコ状土坑：図3-19>

G4グリッド付近に位置する。1.4m弱の深さで、底面中央にピットがある。遺物は、円筒下層d1式土器（図3-26-31）などが出土した。縄文前期末葉の遺構と判断された。

136号<フラスコ状土坑：図3-19>

G5グリッドに位置する。50cm弱の深さで、底面中央にピットがある。後世の削平で上部構造を失ったフラスコ状土坑と考えている。遺物は、円筒下層d1式土器や石器などが出土した。縄文前期末葉の遺構と判断された。

137号<フラスコ状土坑：図3-19>

G5グリッド付近に位置する。70cm弱の深さで、底面にピットがある。この遺構も後世の削平で上部構造を失ったフラスコ状土坑と考えている。円筒下層式土器片などが出土したため、縄文前期末葉の遺構と推測した。

138号<フラスコ状土坑：図3-19>

H4グリッド付近に位置する。70cmほどの深さで、底面中央にピットがある。円筒下層式土器などが出土したため、縄文前期の遺構と判断した。

41号<土坑墓：図3-20>

D12～E12グリッドに位置する。南北方向に1.5mほどの長軸を持ち、覆土2層下位より、石斧・石鏃（図3-27-32・33）などがまとまって出土した。また覆土も人為的に埋め戻された様相を呈している。他の類似する遺構から勘案して、縄文前期末葉頃の土坑墓と判断し、出土した石器は副葬品と考えられた。

53号<土坑墓：図3-20>

F11～12グリッドに位置する。南北方向に1.3mほどの長軸を持ち、前述の41号に類似する平面形・覆土の状態を呈する。遺物は円筒下層式土器片がごく少量出土した。縄文前期末葉頃の土坑墓と推定された。

65号<土坑墓：図3-20>

D9グリッド付近に位置する。南北方向に1.3mほどの長軸を持ち、覆土2層下位より、石鏃や石槍（図3-27-34～36）が出土した。覆土も人為的に埋め戻された様相を呈しており、他の類似する遺構から勘案して、縄文前期末葉頃の土坑墓と判断され、出土した石器は副葬品と考えられた。

68号<土坑墓：図3-20>

C10グリッドに位置する。北東～南西方向に1.3mほどの長軸を持つ。遺物は、円筒下層d1式土器片少量と石槍（図3-27-37）が出土した。覆土も人為的に埋め戻された様相を呈しており、これも縄文前期末葉頃の土坑墓と判断され、出土した石器は副葬品と考えられた。

69号<土坑墓：図3-20>

C9・D9グリッドに位置する。東側で74号を掘り込んでいると考えている。南北方向に1.6mほどの長軸を持ち、覆土は人為的に埋め戻された様相を呈する。出土遺物はない。他の類似する遺構から勘案して、縄文前期末葉頃の土坑墓と推測された。

70号<土坑墓：図3-20>

D10グリッド付近に位置する。北東～南西方向に1.9mほどの長軸を持つ。覆土1～2層の境目付近より、石斧・石鏃など（図3-27-38～40）がまとまって出土した。覆土は人為的に埋め戻された様相を呈しており、他の類似する遺構から勘案して、縄文前期末葉頃の土坑墓と判断し、出土した石器は副葬品と考えられた。

78号＜土坑墓：図3-21＞

E10グリッド付近に位置する。南北方向に1.8m強の長軸を持つ。遺物は円筒下層式土器片が少量出土した。覆土は人為的に埋め戻された様相を呈しており、他の類似する遺構から勘案して、縄文前期頃の土坑墓と推定した。

92号＜土坑墓：図3-21＞

D10グリッドに位置する。南北方向に1.6mほどの長軸を持つ。遺物は、円筒下層d1式土器片少量と石槍（図3-27-41）や石錐が出土した。覆土も人為的に埋め戻された様相を呈しており、これも縄文前期末葉頃の土坑墓と判断され、出土した石器は副葬品と考えられた。

128号＜土坑墓：図3-21＞

F7グリッドに位置する。南北方向に1.7mほどの長軸を持つ。遺物は、磨石（図3-27-42）が1点出土した。覆土は人為的に埋め戻された様相を呈しており、他の類似する遺構から勘案して土坑墓と推定した。年代は縄文前期～中期以外、詳細不明である。

145号＜土坑墓：図3-21＞

I7グリッドに位置する。南北方向に1mほどの長軸を持つ。遺物は、縄文前期～中期の土器片が1点出土した。覆土は人為的に埋め戻された様相を呈しており、他の類似する遺構から勘案して土坑墓と推定した。年代は縄文中期と推定された。

146・147号＜土坑墓：図3-21＞

D6グリッドに位置する。146号が147号を掘り込んでいる。146号は南北方向に1.1mほどの長軸を持つ。遺物は、石錐のほか円筒上層a式土器が口縁部を南に向け、横位に埋設された状況で出土した（図3-28-43・44）。覆土は人為的に埋め戻された様相であることから、縄文中期初頭頃の土坑墓（土坑内土器埋設墓）と判断された。

147号は、形状はフラスコ状土坑であるが、覆土3層より出土した石器（図3-28-45～49）や覆土の人為的な埋め戻し状況から見て、墓坑に転用されたものと判断された。少量の円筒下層式土器が出土したことから、縄文前期の墓坑（土坑墓）と判断された。

148号＜土坑墓：図3-21＞

D6グリッド付近に位置する。南北方向に1.4mほどの長軸を持つ。縄文中期と考えられる土器片が少量出土したこと、覆土に人為的な埋め戻し状況が見られること、すぐそばに146号が所在することなどから、縄文中期の土坑墓と推定している。

156号＜土坑墓：図3-22＞

K6グリッドに位置する。北東～南西方向に2mほどの長軸を持つ。遺物は、覆土1～2層境目より円筒上層a式土器が口縁部を南に向け、横位に埋設された状況で出土した（図3-28-50）。覆土は人為的に埋め戻された様相がみてとれることから、縄文中期初頭頃の土坑墓（土坑内土器埋設墓）と判断された。

157号＜土坑墓：図3-22＞

M8グリッドに位置する。北東～南西方向に1.6mほどの長軸を持つ。遺物は、円筒上層式土器片が少量と磨石が1点出土している。また、覆土は人為的に埋め戻された様相がみてとれることや他の類似する遺構の形状等から、縄文中期の土坑墓と判断された。

141・142・143号＜落とし穴・落とし穴・土坑墓：図3-22＞

J6グリッド付近に位置する。143号は礫石器が1点出土しているのみであるが、覆土が人為的に埋め戻された様相がみてとれることや他の類似する遺構の形状等から、縄文中期の土坑墓と判断された。

142号は、143号に掘り込まれている。その形状から、いわゆる「Tピット」、落とし穴であろうと考えられる。また、142号の東に隣接し、これと平行に位置する141号も「Tピット」と判断された。両遺構ともわずかに出土した土器片から、143号に先行する縄文中期段階の遺構で、おそらく同時期に機能したものと判断された。地山の推移を見ると、141・142号付近から北東方向に向け傾斜が始まることから、傾斜をおりてゆく動物を狙って仕掛けられた落とし穴であった可能性が考えられた。

54号＜埋設土器：図3-22＞

E9グリッドに位置する。長径50cm程度のピットに円筒下層d１式土器（図3-28-51）が正立状態で埋設された縄文前期末葉の遺構である。周囲に類似した遺構はないが、縄文前期末葉を中心とする土坑墓群が近隣（埋設土器の南）に分布していることから、この埋設土器も、いわゆる「こどもの墓」であり、前述の土坑墓とともに「墓域」を構成する遺構のひとつなのかも知れない。

表3-1 平成20・21（2008・2009）年度 検出遺構

No.	遺構番号	種別	年代	グリッド	規模(m) 長軸	短軸	深さ	調査年度	備考
1	島A	島跡	平安	B12,B13,C11,C12,C13,D11,D12,E11,E12,F10,F11	—	—	—	平成20	
2	島B	島跡	平安	C9,C10,C11,D9,D10,D11,E9,E10,E11,F9,F10	—	—	—	平成20	
3	島C	島跡	平安	C8,C9,D8,D9,E8,E9,F8,F9	—	—	—	平成20	
4	島D	島跡	平安	C7,C8,D7,D8,E7,E8,F7,F8	—	—	—	平成20	
5	島E	島跡	平安	C7,D6,D7,E6,E7,F6,F7,G6,G7	—	—	—	平成20	
6	島F	島跡	平安	D6,E6,F6	—	—	—	平成20	
7	島G	島跡	平安	D5,D6,E4,E5,E6,F4,F5,F6,G4,G5,G6	—	—	—	平成20	
8	島H	島跡	平安	F9,F10,F11,G9,G10,G11,H9	—	—	—	平成20	
9	島I	島跡	平安	G10,G11,H8,H9,H10,H11,I8,I9,I10	—	—	—	平成20	
10	島J	島跡	平安	I8,I9,I10,J8,J9,K8	—	—	—	平成20	
11	島K	島跡	平安	J8,J9,K8,K9,	—	—	—	平成20	
12	島L	島跡	平安	F7,F8,G5,G6,G7,G8,G9,H5,H6,H7,H8,H9,I5,I6,I7,I8,J5,J6,J7,J8,K5,K6,K7,K8,L7	—	—	—	平成20	
13	島M	島跡	平安	G4,G5,G6,H4,H5,H6,I4,I5,I6,J4,J5,K5	—	—	—	平成20	
14	島N	島跡	平安	K6,L7,L8,M7,M8	—	—	—	平成20	
15	島O	島跡	平安	K6,L6,L7	—	—	—	平成20	
16	島P	島跡	平安	M8,M9,N8,N9,O9	—	—	—	平成20	
17	島上溝A	溝跡	平安	D5,D6,E6,F6,G6,H6,I6,J6,J7,K6,K7,L6,L7	幅0.5	—	0.1	平成20	島上溝Cを掘り込み、島上溝BにC掘り込まれる
18	島上溝B	溝跡	平安	J4,J5,J6,K5,K6,L6,L7	幅0.6	—	0.1	平成20	島上溝A、島上溝Cを掘り込む
19	島上溝C	溝跡	平安	G5,G6,H5,H6,I5,J4	幅0.5	—	0.05	平成20	島上溝A、島上溝BにC掘り込まれる
20	島上溝D	溝跡	平安	J4,J5,K5,K6	幅0.4	—	0.05	平成20	
21	1号新	竪穴住居跡	縄文前期末葉	K11,K12,L11,L12,M11,M12	6.8	—	0.8	平成20	
22	1号旧	竪穴住居跡	縄文前期末葉	K11,K12,L11,L12,M11,M12	6.8	—	0.6	平成20	
23	2号	炭窯	平安（B-Tm以前）	J10,J11,K10,K11	1.9	—	0.1	平成20	11号、29号を掘り込む
24	3号	Pit	縄文	I11	0.3	—	0.1	平成20	
25	4号	Pit	縄文	I11,J11	0.5	—	0.2	平成20	
26	5号	Pit	縄文	J11	0.2	—	0.2	平成20	
27	6号	Pit	縄文	J11	0.2	—	0.3	平成20	
28	7号	Pit	縄文	J10	0.3	—	0.2	平成20	
29	8号	Pit	縄文	K10	0.3	—	0.4	平成20	
30	9号	Pit	縄文	K10	0.4	—	0.1	平成20	
31	10号	Pit	縄文	K11	0.4	—	0.2	平成20	
32	11号	Pit	縄文	J11,K11	0.6	—	0.3	平成20	2号に掘り込まれる
33	12号	フラスコ状土坑	縄文中期	G20	2.0	1.7	0.8	平成20	底面にPitが付属
34	13号	フラスコ状土坑	縄文中期後葉	F19,G19	1.7	1.7	1.5	平成20	14号を掘り込む
35	14号	土坑	縄文中期	F19,F20,G19	1.3	—	0.4	平成20	13号に掘り込まれる
36	15号	土坑	縄文中期	G19	1.4	—	0.2	平成20	
37	16号	土坑	縄文中期後葉	E18	2.3	—	1.0	平成20	
38	16号b	土坑	縄文中期後葉	D16,E16	0.7	—	0.7	平成20	
39	17号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉？	D16	1.6	1.8	0.7	平成20	
40	18号	土坑	縄文中期後葉	D15,D16	2.8	—	0.9	平成20	
41	18号b	土坑	縄文中期後葉	D15,D16	1.5	—	0.4	平成20	
42	19号	土坑	縄文前期末葉	E17	3.0	—	0.3	平成20	
43	20号	フラスコ状土坑	縄文中期中葉	E17,E18	1.8	1.7	1.3	平成20	
44	21号	土坑	縄文前～中期	E17,E18	1.9	—	0.3	平成20	根の可能性あり
45	22号	竪穴住居跡	縄文中期後葉	E18,E19,F18,F19	5.3	—	0.5	平成20	
46	23号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	C13,C14,D13,D14	1.6	2.3	1.4	平成20	底面にPit、溝が付属
47	24号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	D12,D13	1.9	2.6	0.5	平成20	底面にPitが付属
48	25号	フラスコ状土坑	縄文中期	G12,G13	1.1	1.3	0.5	平成20	
49	26号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉？	G12,H12	1.6	1.9	1.3	平成20	
50	27号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	C12	1.4	1.8	1.3	平成20	
51	28号	埋甕土器	縄文前期末葉	C13	0.4	—	0.2	平成20	
52	29号	Pit	縄文	J11	0.4	—	0.1	平成20	2号に掘り込まれる
53	30号	土坑	縄文中期	I9,I10	1.5	—	0.3	平成20	
54	31号	土坑	縄文中期	F18,F19	2.3	—	0.5	平成20	
55	32号	土坑	縄文中期	F18	1.3	1.8	1.4	平成20	
56	33号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	B13,C13	1.7	2.1	1.5	平成21	底面にPit、溝が付属
57	34号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	C12,C13	1.6	2.0	1.4	平成21	
58	35号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	C12,C13,D13	2.0	2.5	1.5	平成21	底面にPitが付属
59	36号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	B12,C12	1.5	1.8	1.6	平成21	
60	37号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	C12	1.8	2.4	1.8	平成21	底面にPitが付属、ヤマトシジミ内包
61	38号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉？	C12,D12	1.4	1.7	1.2	平成21	底面にPitが付属
62	39号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉？	D12	1.7	1.8	0.9	平成21	底面にPit、溝が付属、40号を掘り込む
63	40号	土坑	縄文前期？	D12	2.2	—	0.7	平成21	39号に掘り込まれる
64	41号	土坑墓	縄文前期末葉	D12,E12	1.5	—	0.2	平成21	
65	42号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	D11,D12,E11,E12	1.6	1.9	1.5	平成21	底面にPit、溝が付属
66	43号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	B11,B12,C11,C12	2.0	2.4	1.6	平成21	底面にPitが付属、ヤマトシジミ内包
67	44号	土坑	縄文前期	C11,C12,D11,D12	2.7	—	0.5	平成21	
68	45号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	B11,C11	2.0	2.8	1.6	平成21	底面にPitが付属、ヤマトシジミ内包

No.	遺構番号	種別	年代	グリッド	規模(m) 長軸	底径	深さ	調査年度	備考
69	46号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	C11,C12	1.3	2.1	1.4	平成21	底面にPitが付属
70	48号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	C11,C12,D11,D12	1.5	2.0	1.3	平成21	底面にPitが付属
71	49号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	F11	1.3	1.9	1.5	平成21	底面にPitが付属
72	50号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	F11,F12,G11,G12	1.3	1.8	1.9	平成21	底面にPitが付属
73	51号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	G11	1.5	2.3	2.0	平成21	底面にPitが付属
74	52号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	G11	1.7	2.1	1.9	平成21	底面にPitが付属
75	53号	土坑墓?	縄文前期末葉?	F11,F12	1.3	—	0.2	平成21	
76	54号	埋設土器	縄文前期末葉	E9	0.5	—	0.3	平成21	
77	55号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉?	D10,E10,E11	1.9	2.0	1.7	平成21	底面にPitが付属
78	56号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	D11,E11	1.5	2.0	1.6	平成21	底面にPitが付属
79	57号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	F10	1.4	2.7	1.6	平成21	底面にPit、溝が付属
80	58号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	G10	1.4	1.6	0.9	平成21	底面にPitが付属
81	59号	溝(機列跡?)	平安 (B-Tm以前)	F4,F5,F6,F7	(14.4)	—	0.2	平成21	
82	60号	土坑 (粘土採掘跡?)	縄文前期～中期?	E5,E6	3.3	—	1.1	平成21	150号を掘り込む
83	61号	配石遺構	縄文	D7	0.6	—	0.1	平成21	
84	64号a	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	D5,D6,E5,E6	1.6	1.8	1.0	平成21	底面にPitが付属、64号bを掘り込み、84号dに掘り込まれる
85	64号b	土坑	縄文前期	D5,E5	1.4	—	0.3	平成21	64号cを掘り込み、64号aに掘り込まれる
86	64号c	土坑	縄文前期	D5,E5	1.2	—	0.7	平成21	149号、64号bに掘り込まれる
87	64号d	土坑	縄文前期	E5	(0.6)	—	0.5	平成21	84号aを掘り込む
88	65号	土坑墓	縄文前期末葉	D9,D10	1.3	—	0.2	平成21	
89	66号	炉跡?	平安 (B-Tm以前)	H9	1.9	—	0.8	平成21	
90	67号	土坑	縄文前期?	E7	1.4	—	0.2	平成21	2つの遺構か?
91	68号	土坑墓	縄文前期末葉	C10	1.3	—	0.2	平成21	
92	69号	土坑墓?	縄文前期末葉?	C9,D9	1.7	—	0.1	平成21	74号を掘り込む
93	70号	土坑墓?	縄文前期末葉	D10,E10	1.9	—	0.3	平成21	
94	71号	土坑	縄文前期末葉	C10	2.3	—	0.9	平成21	72号を掘り込み、83号に掘り込まれる
95	72号	フラスコ状土坑	縄文前期	C10	1.7	1.3	0.9	平成21	底面にPitが付属、71号、83号に掘り込まれる
96	74号	フラスコ状土坑	縄文前期?	D9	1.4	1.6	1.0	平成21	側面と底面にPitが付属、75号を掘り込む
97	75号	フラスコ状土坑	縄文前期?	D9	0.9	(0.8)	0.4	平成21	74号に掘り込まれる
98	78号	土坑墓?	縄文前期?	E9,E10	1.8	—	0.2	平成21	115号に掘り込まれる
99	79号	Pit	縄文?	D7	0.3	—	0.2	平成21	
100	80号	Pit	縄文?	C9	0.3	—	0.3	平成21	164号に付属?
101	81号	Pit	縄文?	C9	0.4	—	0.4	平成21	164号に付属?
102	82号	Pit	縄文?	C10	0.4	—	0.4	平成21	164号に付属?
103	83号	Pit	平安 (B-Tm以前)	C10	(0.4)	—	0.3	平成21	71号、72号を掘り込む
104	84号	竪穴住居	縄文中期中葉	C10,C11,D11	4.3	—	0.6	平成21	85号を掘り込む
105	85号	土坑	縄文前期	C10,C11	2.6	—	0.8	平成21	84号に掘り込まれる
106	86号	Pit	縄文中期中葉	C10	0.3	—	0.3	平成21	164号に付属
107	90号	Pit	縄文?	C9	0.3	—	0.1	平成21	164号に付属?
108	91号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	C10,D10,D11	1.5	1.9	1.4	平成21	底面にPit、溝が付属
109	92号	土坑墓	縄文前期末葉	D10	1.8	—	0.3	平成21	
110	99号	Pit	縄文?	C10	0.4	—	0.2	平成21	164号に付属?
111	99号	Pit	縄文?	C10	0.3	—	0.2	平成21	164号に付属?
112	102号	Pit	縄文?	C9,C10	0.6	—	0.1	平成21	164号に付属?
113	108号	土坑	縄文中期?	E9,E10	1.0	—	0.2	平成21	109号、114号を掘り込む
114	110号	土坑	縄文前期?	E9	2.2	—	0.9	平成21	底面にPitが付属
115	113号	土坑	縄文前期末葉	D9	2.0	—	1.0	平成21	
116	121号	フラスコ状土坑	縄文前期?	C9,D9	1.3	1.9	1.2	平成21	周囲と底面にPitが付属
117	128号	土坑墓?	縄文前期～中期	F7	1.7	—	0.2	平成21	
118	135号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	G4,G5	1.3	2.1	1.4	平成21	底面にPitが付属
119	138号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	G5	1.4	1.2	0.5	平成21	底面にPitが付属
120	137号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉?	G5,H5	0.9	1.0	0.7	平成21	底面にPitが付属
121	139号	フラスコ状土坑	縄文前期	H4,I4	1.1	1.1	0.7	平成21	底面にPitが付属
122	139号	土坑	縄文前期	H4	0.9	—	0.3	平成21	
123	140号	土坑	縄文前期	H5	0.8	—	0.5	平成21	
124	141号	落とし穴(ピット)	縄文中期	J5,J6,K6	3.8	—	1.2	平成21	
125	142号	落とし穴(ピット)	縄文中期	I5,I6,J6	2.8	—	0.9	平成21	143号に掘り込まれる
126	143号	土坑墓	縄文中期	I6,J6	1.4	—	0.3	平成21	142号を掘り込む
127	145号	土坑墓?	縄文中期?	I7	1.0	—	0.2	平成21	
128	146号	土坑墓	縄文中期初頭	D8	1.1	—	0.3	平成21	147号を掘り込み、185号に掘り込まれる
129	147号	土坑墓	縄文前期	D8	1.0	—	0.4	平成21	146号に掘り込まれる
130	148号	土坑墓?	縄文中期?	D5,D6	1.4	—	0.1	平成21	148号bに掘り込まれる
131	148号b	Pit	縄文?	D6	0.3	—	0.4	平成21	148号aを掘り込む
132	149号	土坑?(柱穴?)	縄文	D5	0.8	—	0.8	平成21	84号cを掘り込む
133	150号	土坑?	縄文前期末葉	E5	2.3	—	0.7	平成21	154号を掘り込み、60号に掘り込まれる
134	154号	フラスコ状土坑	縄文前期末葉	E5,F5	1.5	1.2	0.5	平成21	150号に掘り込まれる
135	159号	Pit	縄文?	D6	0.4	—	0.3	平成21	
136	156号	土坑墓	縄文中期初頭	K6	2.0	—	0.1	平成21	
137	157号	土坑墓	縄文中期	M6	1.6	—	0.2	平成21	
138	158号	Pit	縄文?	E6	0.4	—	0.2	平成21	
139	159号	Pit	縄文前期	J8	0.3	—	0.1	平成21	
140	160号	Pit	縄文中期?	C8	0.3	—	0.4	平成21	164に付属?
141	161号	土坑	縄文前期	C10	(1.3)	—	0.2	平成21	164号に掘り込まれる
142	162号	Pit	平安 (B-Tm以前?)	C10	(0.3)	—	0.1	平成21	
143	163号	土坑	縄文?	C10	1.3	—	—	平成21	調査区域のため未調査
144	164号新	竪穴住居	縄文中期	C8,C10	(5.1)	—	0.5	平成21	
145	164号旧	竪穴住居	縄文中期	C8,C10	(4.8)	—	0.7	平成21	
146	165号	Pit	縄文前期	D6	3.0	—	0.3	平成21	146号を掘り込む

( ):切り合い関係や調査区の関係から本来の規模や形状を復元できない遺構の計測値

表3-2　平成元～9（1989～1997）年度　検出遺構＜参考＞

No.	遺構番号	種別	年代	平成20・21年度対応グリッド	規模(m) 長軸	底径	深さ	調査年度	備考
1	1号住居跡	竪穴住居	縄文前期末業	F16,F17,G16,G17,H16,H17	8.1	—	1.0	平成元	
2	2号住居跡	竪穴住居	縄文前期末業	E14,E15,E16,F14,F15,F16	10.2	—	0.5	平成元	
3	3号住居跡	竪穴住居	縄文前期？	H13,H14,I13,I14	6.3	—	0.5	平成2	
4	4号-1住居跡	竪穴住居	縄文中期末業	K13,K14,L13,L14,M13,M14	10.5	—	0.6	平成5	
5	4号-2住居跡	竪穴住居	縄文中期末業	K13,K14,L13,L14,M13,M14	10.5	—	1.0	平成5	
6	5号住居跡	竪穴住居	縄文前期末業	H14,H15,I14,I15,J14,J15	8.5	—	0.7	平成2	
7	8号住居跡	竪穴住居	縄文前期末業	J15,J16,K15,K16	3.3	—	0.3	平成2	
8	7号住居跡	竪穴住居	縄文前期末業	K17,K18,L17,L18,M17,M18	7.5	—	0.6	平成2・7	
9	8号住居跡	竪穴住居	不明	J17,K17	2.8	—	0.4	平成2	
10	9号住居跡	竪穴住居	縄文前期末業	H17,I17,I18,J17	5.1	—	0.4	平成4	
11	10号-1住居跡	竪穴住居	縄文中期初頭	G19,G20,H19,H20,I19,I20	10.5	—	0.7	平成4	
12	10号-2住居跡	竪穴住居	縄文中期？	H19,H20,I19,I20	9.0	—	0.5	平成4	
13	10号-3住居跡	竪穴住居	縄文前期末業	H19,H20,I19,I20	8.1	—	0.6	平成4	
14	11号住居跡	竪穴住居	縄文前期末業	M12,M13,N12,N13	6.2	—	0.7	平成5	
15	12号住居跡	竪穴住居	縄文前期末業	O11,O12,O13,P11,P12,P13,Q12,Q13	10.7	—	1.5	平成6	
16	13号住居跡	竪穴住居	不明	L9,L10,M9,M10	6.1	—	0.6	平成7	
17	14号住居跡	竪穴住居	不明	N15,N16,O15,O16	8.0	—	1.0	平成7	
18	15号住居跡	竪穴住居	縄文前期末業	K11,K12,L11,L12	(6.6)	—	0.7	平成9	平成20年度調査の1号
19	1号フラスコ型ピット	フラスコ状土坑	縄文前期	E15	0.7	1.2	1.4	平成元	遺構番号未記載
20	2号フラスコ型土坑	フラスコ状土坑	不明	G12	1.9	2.0	1.6	平成2	周囲と底面にPitが付属
21	3号フラスコ型土坑	フラスコ状土坑	縄文前期末業	H15,H16,I15,I16	1.8	1.8	1.1	平成2	底面にPit、溝が付属
22	4号フラスコ型土壙	フラスコ状土坑	不明	D14,E14	1.6	2.2	0.8	平成4	底面にPitが付属
23	5号フラスコ型土壙	フラスコ状土坑	不明	D13	1.8	1.8	1.2	平成4	底面にPit、溝が付属
24	6号フラスコ型土壙	フラスコ状土坑	不明	E13,F13	2.0	2.5	1.0	平成4	底面にPitが付属
25	7号フラスコ型土壙	フラスコ状土坑	不明	D14	1.2	1.7	0.5	平成4	底面にPitが付属
26	8号フラスコ型土壙	フラスコ状土坑	不明	F17	1.2	2.0	0.8	平成4	底面にPitが付属
27	9号フラスコ型土壙	フラスコ状土坑	不明	G19,H19	1.8	2.2	1.8	平成4	底面にPitが付属
28	10号フラスコ型土壙	フラスコ状土坑	不明	I20	1.1	1.2	1.2	平成4	
29	11号フラスコ型土壙	フラスコ状土坑	不明	I20	1.1	1.4	1.6	平成4	底面にPitが付属
30	12号フラスコ型土壙	フラスコ状土坑	不明	K12,L12	1.3	2.0	1.5	平成5	底面にPitが付属
31	13号フラスコ型土壙	フラスコ状土坑	縄文前期末業	L15	1.5	1.8	0.7	平成5	
32	14号住居内1号フラスコ状土壙	フラスコ状土坑	不明	N15	1.2	1.4	1.5	平成7	
33	14号住居内2号フラスコ状土壙	フラスコ状土坑	不明	N16	1.1	2.4	1.5	平成7	
34	14号フラスコ状土坑	フラスコ状土坑	不明	K11	0.8	1.5	0.7	平成9	遺構番号未記載
35	1号土壙	土坑	不明	G15	1.2	—	0.2	平成元	
36	2号土壙	土坑	不明	不明	—	—	—	平成元	検出後にプラン不明
37	3号土壙	土坑	縄文中頭後業	O15	(2.4)	—	0.4	平成元	平成20年度調査の18号
38	4号U字型土坑	土坑	縄文前期末業	E12,F12	1.8	—	0.7	平成2	
39	5号土坑	土坑	不明	G12	1.0	—	0.3	平成2	
40	6号皿型土壙	土坑	不明	H17,H18	1.4	—	0.2	平成4	
41	7号U字型土壙	土坑	不明	G19	2.2	—	0.6	平成4	
42	8号-1U字型土壙	土坑	不明	J12,J13	(1.1)	—	0.4	平成5	
43	8号-2U字型土壙	土坑	不明	J13,K13	2.0	—	0.4	平成5	
44	8号-3U字型土壙	土坑	不明	J12,J13,K12,K13	(2.1)	—	0.5	平成5	
45	14号住居内1号土壙	土坑	不明	N15,O15	1.2	—	0.7	平成7	
46	9号土坑	土坑	不明	I11	1.8	—	0.4	平成9	遺構番号未記載
47	1号埋土器	埋設土器	縄文前期末業	E14,E15	0.3	—	0.3	平成元	遺構番号未記載
48	1号焼跡遺構	焼跡遺構	平安（B-Tm以前）	J10,J11,K10,K11	2.1	—	0.4	平成9	遺構番号未記載。平成20年度調査の2号

（ ）：切り合い関係や調査区の関係から本来の規模や形状を復元できない遺構の計測値
遺構の年代は概報（新谷ほか1990、新谷1991・1994・1995）に従った